第3755図

かやつりぐさ科

ひめごうそ

Carex phacota *Spreng.*
var. gracilispica *Kükenth.*

前種ホナガヒメゴウソの一形で、分布も大体重なるが、この方が多い。全体に稍々小形で高さ30cm内外、雌小穂は短小で長さ3cm以下が多く、穎は芒短かく、その上、果嚢の方が長さが優るため、小穂は前種の芒が開出するのに較べて粒状点々として、しかも直立するため印象は大変違う。系統発生的にはこの方が原型と思われ、和名の附け方はそれと偶然一致しているが、学名の形式は正反対となっている。

第3756図

かやつりぐさ科

あわすげ

一名とだすげ

Carex aequialta *Kükenth.*

関東、濃尾、筑後諸平野の大河の汎濫原をなす高水位の草原或は疎林下に生ずる多年草本で、3-5本の茎が集った株が点在し、決して群落を作らない。高さ50cm内外、茎はほぼ直立し、全株淡緑色、乾けば穂のみ急速に赤褐色化する特徴がある。葉は巾5mm、平坦、稍軟かい。茎は鋭3稜、頂に数個、長さ4cm内外の小穂を箒状にほぼ同じ高さにつけ、雄穂は目立たぬ。雌穂は円柱状、膨らんだ果嚢累々として粟粒状に見え、由って著者は和名を附けた。雌花穎（上）は膜質、果嚢（下）は長さ2.5mm強、両端の僅かに尖った偏圧の球に近く、厚膜質で紙袋状に膨れ両縁のほか縦に不明瞭の数脈あって平滑。トダスゲは戸田スゲで、東京北部、荒川の戸田ケ原のことで産地の一つであった。

第3757図

かやつりぐさ科

ほろむいすげ

一名くろすげ，とまりすげ

Carex Middendorffii *Fr. Schm.*

信州以北から遠くオホーツク海沿岸の水蘚湿原に生ずる多年生草本。根茎斜上しつつ分岐して叢生、茎は高さ50cm内外あり。下部には淡褐色の鞘状葉を伴う。葉は乾いた感じで剛く、多少白味勝の淡緑色、中脈で軽く折れたたまれる。茎も剛直鋭稜、頂に3-4小穂をつけ、頂のは雄性で線形、他は多くは両性で頂端に尾状の雄性部をつけ長さ2cm内外の太柱状。下方のものは長梗あって軽く傾頭する。雌花穎（上）は黒紫色、狭く緑背となり披針形で鋭頭、稀に短芒あり。果嚢（下）は白緑色、片面平らのレンズ形を帯びた広楕円形で長さ4mm内外、斜めに開いてつき、穎の両側にはみ出してみえる。この点が近似のヤチスゲ（C. limosa *L.*）との区別によい。該種では全く穎に被われている。和名は幅向スゲ。

第3758図

かやつりぐさ科

きりがみねすげ

おにあぜすげ

Carex Middendorffii *Fr. Schm.*
var. kirigaminensis *Ohwi*

前種と混生するが稀なものである。母種にくらべて、雌花穂が長く細くなり、無柄となる傾向強く、最下のものでも短かい柄で、どの小穂も殆んど直立する。穎は巾せまく、果嚢の露出が一層広いから雌小穂はほとんど淡緑色にみえる。樺太から信州にわたって湿原に点在するが、多くはアゼスゲを混ずる地であるから諸形質とにらみ合せてホロムイスゲとアゼスゲとの雑種の疑がある。和名は最初の発見地、信州霧ケ峰に因む。別名はアゼスゲに似て粗大なるによる。

第3759図

かやつりぐさ科

しまたぬきらん

Carex Doenitzii *Boeck.*
var. Okuboi *Kükenth.*

伊豆七島の山地の礫地に生ずる多年生草本。大株となりよく乾燥に耐える。茎の下部には強剛な鞘状葉が重なって赤紫色で光沢がある。葉は質は薄いが強剛、濃緑、巾6mm内外、裏面は蒼緑で5月開花後によく伸びる。茎は3稜で平滑、斜めに出て、頂に小穂5個内外を稍々密集してつける。小穂は殆んど柄がなく、豊かに膨れたのは黒紫色の穎に淡色の長芒が尾毛状に突出しているからである。果嚢はほぼ直立し（右）、長さ5mm、穎でかくれているが、淡緑色で上部深く2裂する。本邦亜高山のコタヌキランの伊豆七島に分化した島嶼型で乾燥への抵抗力を増したものか。

第3760図

かやつりぐさ科

やまたぬきらん

Carex angustisquama *Franch.*

東北地方の火山の焼せた草原や礫原に生える多年生の草本。全体はコタヌキランに似るが、果嚢の先端短く、殆んど2裂しないので区別できる。高さ30cm内外、強固な地下茎が分枝し、茎は3稜で性硬く上方でざらつく。基部には赤褐色の鞘葉あり、古きものは網状にほどける。葉は茎より低く、巾4mm内外で扁たく、裏は乳頭突起で白い。小穂は紫黒色（主に穎の色）で径1cm未満の短柱～卵形、頂のは細くて雄性、最下は長柄と長き葉状苞あつて垂る。穎は卵形、緑背、果嚢は穎より超出し、4mm長、穎より稍々淡色に色づき、卵形で膜質、両縁は尖って上部に微毛を生ずる。極めて短嘴、柱頭2。